保育者及び教諭における童謡曲演奏の技術と指導法に関する一考察

—移調演奏を中心に—

大阪芸術大学短期大学部 通信教育部保育学科 特任講師 塩野亜矢子

1 本研究の背景と目的

本研究は大阪芸術大学短期大学部の学生がこどものうたの旋律を移調演奏し得る技術習得を目指した教授法を考察し、本学学生のピアノ実技に係る基礎力向上に繋げることを目的とする。近年、ピアノの経験がない初心者が入学生が増加しており、ピアノに対して不安な気持ちを抱えている学生が多く見受けられる現象は、多くの諸大学及び諸短期大学の保育学科において共通し、本学においても同様の現象が起きている。この状況を鑑み、本学では入学者がピアノ未経験者若しくは経験年数が約1年未満であることを中心としたカリキュラムの設定が前提となっており、本学や多くの諸大学及び諸短期大学の保育学科においてもピアノ初心者を鑑みたシラバス内容であると推察する。とりわけピアノ初心者にとっては演奏しながら歌うという弾き歌い演奏の習得には相当な練習時間を要し、かつ心理的なハードルが高いという面は否めない。そのうえ何とか演奏出来るところまで到達したとしても、就職先で演奏する際には本学で習得した内容と異なる調性が求められるケースが見られ、臨機応変に対応することが出来ず、戸惑いが生じて上手く演奏することが出来なかった曲があったという卒業生の声が時折筆者の耳に入っていた。

これらの状況を鑑み、筆者は塚本学院教育研究補助費を活用し、ピアノ初心者の学生がより短期間で演奏し得る奏法の習得を目的とした移調演奏についての教授法を考察し、本学学生が教育及び保育現場において対応し得る応用力の獲得を目指した。最終的には本学学生が筆者の令和4年度及び5年度に係るコード伴奏の習得における考察と、今年度の移調伴奏における考察の両方を習得することにより、今後活用し得る演奏技能の範囲が著しく拡大されるところに特色を持ち、本学学生が習得した内容が教育及び保育現場に携わる際の対応能力向上の一助となり得るところに期待したい。

2 研究の内容と方法

本研究は、本学1年生のピアノ初心者（未経験者及

び半年未満の経験者）を中心に考察を行った。移調演奏の習得には現調性の旋律演奏の習得が前提であり、音程等の楽典内容への理解を並行しながら習得する過程を経る。楽譜は本学の「音楽Ⅲ及びⅣ」において使用する『こどものうた200』（小林美実（編）、1975、チャイルド社）を基に、本書記載の調性から別調性への移調若しくはその逆を中心に考察を進めた。理論上では順を追った行程の教授方法で問題無いと想定していたが、考察過程では筆者が予測していた本学学生の反応や理解度とピアノ初心者から見る・感じる視点が異なることが判明し、考察は難航した。筆者は、本学学生がどの段階の過程に難しさを感じているのかなどを対話を通じて掘り下げたところ、各段階の理解を得るには理論上の内容以前に「演奏技術が難しいと感じている内容を理解する際の心理的ハードルの高さ」が深く関係していることが判明した。そこで筆者は、研究の内容及び行程を再検討し、教授する側と教授される側の相互の視点を踏まえて試行錯誤を繰り返しながら考察を進めた。最終的には本学学生自身が理解したと自覚し得るまでに到達し、より正確な教授方法を見出すことに至ったと結論付けた。

3 まとめ

本研究は、弾き歌い演奏と楽典の基礎的知識を併用しながら考察を進め、最終的には筆者の数年に係る研究の教示法を連結させる内容に到達させるところを到達点とする。今回の考察では試行錯誤しながら研究を行い、本学学生自身は演奏技能が向上したと自覚し得る内容に到達した可能性が高いが、その考察における検証が論理的であったとしても、教授される側の視点が各々の学生で異なることにより、効果の範囲や考察内容及び結果を断定することは出来ない。しかし筆者は、確実な音楽理論を用いて学生の演奏における現状の把握及び演奏時の心理的内容を確認しながら、正しい理解及び演奏における考察を重ねてきた。その結果、最終的には考察対象の学生全員が一定数の調号までの移調演奏を導き出し、演奏し得るまでに到達したことは、その演奏技術が本学を卒業し、教育及び保育現場に携わる際の演奏にも紐付けることに奏功した結果が得られたと考える。